
■「アスペクト」の言葉の意味の整理■

自分は、アスペクトという言葉の意味を「天体と天体の角度差」だとずっと思い込んでいました。伝統的にはアスペクトは天体と天体に属するものではなく、「座相」という日本語がいみじくも表わしていたように、「サインとサインの関係」を表わすのですね。これも目からウロコのひとつでした。

言葉の意味を調べると（byジーニアス英和辞典）、「アスペクト」の原語となるラテン語（初14世紀）は「aspectus」。意味は「（見る）→外見上の特徴を見ること」。

また、アスペクトと同義としてよく使われる「behold」のもともとの言葉は、古語英語（初12世紀以前）の「bihealdan」。これは「be-（強意）+hold（保つ、ふるまい）」が元になっていて、その意味は「～を（じっくり）見る、見守る、注視する」。

ウィリアム・リリーの「クリスチャン・アストロロジー」109ページ（Ascella版、50ページ）の「Signs not beholding one another」の図の場合、日本語の感覚では「お互いをよく見ていないサイン同士」というような意味合いになるのでしょうか。

以下、ざっとアスペクトの種類の整理もしてみます。

■サイン同士のアスペクト

60度、90度、120度、180度のサイン間に天体があれば、お互いに「アスペクト」している、「お互いを見る」ことができる状態であるとみなします。

サインと言っても広いので。30度の度数の範囲の中で、例えば蟹の1度と蠍の29度という、端っこの度数同士の天体なら。同じ「見る」にしても「一瞥、ちら見の状態」となるのでしょうか。

ジョン・フローリーさんは本の中でその状況を「周辺視野」に入っていると描写していました。「相手の姿がろうじて視野の隅っこに入っている」という。うまいこと言うものだなと思ったものです。（^^）

以下、天体がお互いを「見る」という状況の、段階による変化のイメージです。

★サイン間でアスペクトしていても。お互いの度数が離れている場合
周辺視野に入ったお互いの存在を認識はしてる。チラチラッと見てる段階
（例：街角で通りの向こう側に友達らしき？姿を見かけて気になり出す）

↓

★天体のオーブの範囲に度数が入る（接近）
だんだん近づくにつれて、お互いの姿がよく「見える」ようになる
（例：やっぱりアイツだ！と確認し手を振っておーい!と呼びかける）

↓

★同じ度数に入る（お互いを見つめ合う。注視し合う。見守る）
（例：お互いに通りの反対側から「久しぶりだな！」と挨拶する）

↓

★完成（パーフェクト）

（例：お互いに通りをはさんで「今度会おう！」と約束する）



★別れ始める（分離）

（例：「じゃまた！その時にゆっくり！」と挨拶して別れる）

#実際には。サインとサインの間には複数の天体が同時に存在することが多いです。その場合、それぞれの天体同士が位置する度数、オーブ、速度、方向（順行or逆行、接近or分離）、品位、レセプションの有る無しを調べることで。複数の天体同士の結びつきのその強弱、優劣、事象が発生する優先順位を、切り分けて判断することができるように思います。

■0度、合（コンジャンクト）

同じサイン内にある天体同士の合、コンジャンクションは「天体同士の関係」「天体同士の結合（bodily conjunction）」とみなします。サインとサインの関係性とは異なるために合は「アスペクト」のカテゴリーからは除外されます。

■30度、150度同士のサイン（＝インコンジャンクト）

アスペクトは「見る」という概念がおおもとにあるので、インコンジャンクトの30度と150度のサイン同士は「見えない、見ない、見ようとしなない」関係と表わされます。転じてそれが「結びつきの無さ」「関連性の無さ」、「疎遠」、「反感」を表わし、お互いが嫌い合う関係とも。「アバージョンaverssion」、「falling amiss」という言い方もあります。

●アバージョンの例外

30度と150度のサイン関係であっても。以下の3つにあてはまれば、お互いを「見る」ことができるといわれています。（コメント31&32：参照）

★アンチッション

★コントラ・アンチッション

★同じルーラーの共有

そして以下、古典ギリシャ期のアスペクトの概念も。アスペクトする天体同士を「法廷で証言する」という状況設定で説明します。ちょっと面白いなと思うので、参考までに。ここでもご紹介。

▼例によって稚訳にて、書籍より引用します。

「伝統占星術の解説書」ジョセフ・クレイン：著 ARHAT：刊

「A Practical Guide to Traditional Astrology」by JOSEPH CRAIN：ARHAT

第3章「ヘレニズムと中世の占星術のアスペクト」より

★39ページ

古代の占星術では、アスペクトに比べてコンジャンクションの「bodily」に使う言葉が異なります。惑星が同じサインにある時、惑星同士は互いに「一緒with」ですが、お互いに

アスペクトするサインにある時には、惑星はお互いに「証言testify」をし、「目撃witness」し、「観察scrutinize」し、「前方を見るlook ahead（訳注：シニスターのこと）、あるいは「光を浴びせるhurl rays」（訳注：デクスターのこと）のです。惑星が同じサインにある時は、惑星同士が混ざり合うようであり、惑星がアスペクトする時には、片方の惑星が気づいて、他の惑星についての証言をします。（私たちの使う「アスペクト」の言葉の意味は、appearanceやview です）

★44ページ

ヘレニズムの映像の考え方によれば、何かものを見る時に目が光線を捉え、物自体に形を与えます。知覚された物体は第二の光線を提供し、物質の法則を提供します。ヘレニズムのアスペクトの言葉は、見ること、関心、観察、証言についてであることを思い出してください。

くりまる

2006年11月05日 03:13

そして。コメント64の図版の話に戻ります。この図版は「12サインの関係性」を表わすアスペクトを、12ハウスに重ね合わせて見るために、wholeサインのハウスシステムを使用。アスペクトによるサインの関係性だけでなく、同時にハウスとハウスのアスペクト関係も表わしたものです。（黄色い部分が上昇宮、ASCに該当します）

グレイで示した12ハウス（30度）と3ハウス（30度）は、1ハウスとアスペクトしていません。同様にグレイの8ハウスと6ハウスも1ハウスとのアスペクトがありません。1ハウスとの結びつきを持たないハウス（＝アバージョンのサイン）となります。

ASCとDSCの地平線のラインと、MCとICのラインとで各ハウスを4区分するのではなく、「1. 4. 7. 10ハウス」の4つのアングルの軸を中心に、両脇のカデントとサクシデントのハウスを1セットで分けると（赤線でくくった部分）、自分はあっ！という感じにて。またもや目からウロコが落ちる思いがしました。

今さら気づいたことは、自分の立ち位置の基本の基本。ASCのある1ハウスの両脇のハウスが「見えない」ハウス（＝アバージョンのサイン）になることです。同時に7ハウスの両脇のハウスも「見えない」のですよね。

4ハウスと10ハウスのアングルは、1ハウスから見て90度の位置のハウス（＝サイン）となります。同時に改めて気づいたのは、その両脇のふたつのハウスが60度と120度のアスペクトになることです。

ここでやっと。60度のイージーアスペクトの説明で目にする「弱めの幸運」とか「機会、チャンス」とか「最初は良くても結果はあまり期待できない、やがてガッカリ」という意味がわかったような気がしました。そうかー。60度の恩恵はやがてすぐ「30度or90度」に転じてしまう訳なのですね。

一方、90度のアフリクトはしんどい「困難と遅延を表す」というのが通例なのですが。めげずにこらえて苦闘する甲斐がありそうに思えてきました。フローリーさんのホラリーのテキストの説明を引用すると、90度は「困難さと遅延を表す」が「niceなできごと」&

「素晴らしい結果をもたらす」。なぜなら、90度はやがて、「60度or120度」に転じるので、努力に応じてもたらされる恩恵が約束されているからなのですね。

図版の例で例えると1ハウスと「10ハウス」との間での困難、行動、努力、がんばりが11ハウスの「天からのギフト、友人」をもたらし、1ハウスと「4ハウス」との間での困難、苦闘、がんばりが結果的としての「喜び、愛、子供」をもたらすのだな〜と。そんなイメージです。

ベタですが。自分は、水戸黄門のテーマ「人生楽ありや苦もあるさ」がBGMに流れてくる気分になりました。「苦あれば楽あり、楽あれば苦あり」という言葉の意味が。ここにも集約されているような気になりました。で、一気に。「ビバ！90度！アスペクト！」という気になってきました。

#ということはやはり。現在の獅子デトリメント土星と蠍5天体とのスクエアも。めげずに粘って苦闘することで。5天体が射手イングレス後に。なんらかの「素晴らしい結果」が。約束されているのでは！とも思うです。(^^)

それに比べて。1ハウス（自分の立ち位置）と7ハウス（他者の立ち位置）の180度は。なかなかひと筋縄ではいかないという気配が。どちらのハウスも前と後に落とし穴のようなグレイゾーンが鎮座ましましてしているし。

自分が思うにですが、「3ハウス～4ハウス～5ハウス（＝サイン）」と「9ハウス～10ハウス～11ハウス（＝サイン）」の領域に比べたら。自分の領域である「12ハウス～1ハウス～2ハウス」と他者の領域となる「6ハウス～7ハウス～8ハウス」が表わすアスペクト（&アバージョン）の方は。なんとも気の重くなる困難、しんどい領域に見えてきて。でも、それだけに「目をそらしてはいけない」重要なパートなのではないか？との再認識をした次第です。

古来のアスペクトの原義「見る」という概念をこれらのグレイゾーンのハウス、そして180度となる7ハウスにあてはめて考えると。もし「ホロスコープチャート」というものがなかったら。それらの部分を自分はけして「見る」ことができなかったかも？とも思うのです。「ホロスコープ・チャート」というものがあるおかげで。この「見えない」ハズの「リンクしがたい」領域を今こうして図によって全体を俯瞰して「見る」ことができる訳であり。「あー、良かった〜」とわりと本気で思ったりしました。

スクエア・チャートの図版も作成してあります。次はそのスクエア・チャートの図版を使い、チャートの「時計まわり」と「反時計まわり」のふたつの方向性（ダイアーナールとゾディアック）とその向きの表わす意味についてを整理しようと思います。

くりまる

2006年11月05日 04:45